

## 話 題

### 第2夫人という選択

高橋理枝

中東でプロポーズされるのにはかなり慣れたが、さすがに「第2夫人になってくれ」というプロポーズには驚いた。もちろん丁重にお断りさせていただいたが、パレスチナ人の友人Aが本当に第2夫人になろうとしていると知った時は、自分がプロポーズされた時以上に驚いたものだ。

Aには「強くて美しい」という形容が良く似合う。地元から離れて一人で都会で働いていて(女性が家族を離れて働くのはそう多いことではない)、スカーフは絶対に被らず、時にはヘソのみえる服を着てきて、日本でもしっかりヘソを隠している私をぎょっとさせた。

美人のAに言い寄る男性は何人かいたが、Aが選んだのは既婚で子持ちの男性Bだった。パレスチナではムスリム男性は4人まで妻をもつことが認められている。Aによると、ともに解放組織の闘士だったBとその妻は、投獄等で離れていた時期も長く、互いに尊敬はしているが愛はないのだという。Aは、Bが妻と離婚すると彼女と子供が路頭に迷うのでかえって気が重い、第2夫人になる方がいいと言う。しかし他方、一度も会ったことがないBの妻に「会えばたぶん嫉妬するから」会いたくないとも言う。やはり他に妻がいるなんて嫌だというのが本音だろう。

皮肉なことに第2夫人になるという決断がもて、彼女は勤めていた女性団体を解雇されてしまった。一夫多妻に反対している女性団体は、第2夫人になるAをおいておくことはできなかったようだ。私はAに会うまで、第2夫人などになってしまうのは、自己主張できない若い少女が家族に強制されるからだと思っていた。しかし「可哀相な犠牲者」という形容はAには当たらない。私は、Aの意志は尊重したいものの、祝福してよいものやら、またこの事態をどう解釈してよいかわからず、もやもやしたものを抱えたまま帰国した。結局Aは、その後Bが「いい人ではないことがわかったので」婚約を解消し、現在は他の男性と(唯一の妻として)幸せな結婚生活を送っている。おかげで私のもやもやは解消されたが、アラブ女性のエンパワーメントについて考える貴重な事例を失うことにもなった。まあAが幸せなので私は満足なのだが。

(たかはし りえ/図書館)